

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・准教授

氏 名：野尻 紀恵

研究課題名：美浜町における子どもを対象とした地域福祉拠点づくりに関する研究
—子どもの夜の居場所支援の実践を通して—

研究の目的

美浜町では、若年層を中心に人口の町外転出が続いており、人口・世帯の減少傾向、少子高齢化の進行が顕著になってきている。それに伴い、町内での子育ては地域とつながりにくくなっている。一方、転出したあとに残る空き家の利用がされはじめ、名古屋等から家族と共に転入してくる新たな流入層の子育てと地域もつながりにくいという現状がある。さらに、温泉・観光に従事する家庭等の子どもたちが一人で夜を過ごすという事例も見られる。これらの状況から、子ども自身や子育て世代が地域とつながり、安心して過ごせる空間・時間をいかに創出していくかは、地域の課題の一つとなっている。子ども食堂や学習支援はこれらの課題解決の一つの方法として注目すべき方法である。

子どもの貧困、孤立などの問題状況に対して、全国各地で学習支援や子ども食堂が行われるようになった。例えば「子ども食堂」の取り組みでは、地域の潜在的な資源が活用され、数多くの人たちが集いコミュニティを形成している。このような取り組みは、当該の子どもたちに安心した食事の場を与えるだけでなく、そこに集う大人たちもつながり、多様な関係性が紡ぎだされている。学習支援の実践も然りである。しかし、これらの取り組みは実践報告がされてはいるものの、そのコミュニティがどのように形成され、どのようなつながりが生まれているのか、子どもたちはどのように育っているのか、など詳細な実態は明らかにされてはいない。そこで本研究では、子どもを中心に据えたコミュニティ形成の様態を参加者の変容という視点から明らかにし、子どもを対象とした地域福祉拠点づくりにつながる可能性を明らかに

することを目的とする。

プロジェクト目標の達成状況・成果内容

プロジェクト内容として、以下の3点に取り組んだ。

イ) 美浜町における子ども・子育ての課題について調査する。

【達成状況】

学校・主任児童委員・社会福祉協議会・NPO等、子どもを支援する方々に聞き取り調査を実施。調査対象者が、本研究プロジェクト(ロ)子どもの夜の居場所支援の実際の中で顔合わせできる等、支援者のネットワーク化に向けた取り組みのきっかけを創った。

【成果内容】

美浜町における課題

- ① 要保護児童の存在とケースカンファレンスの難しさ
- ② 学校で発見された家庭の課題に学校が介入できない難しさ
知ったとしても励ますことしかできない
スクールソーシャルワーカーが雇用されていないのでソーシャルワークの支援が必要な子どもに支援が届かない
- ③ 子ども・子育てのための社会資源が乏しい
- ④ 子育ての課題は家庭の責任だという考え方がまだまだ強い
- ⑤ 子ども・子育てのために支出する余裕はない

ロ) 美浜町奥田地区における子どもの居場所支援(子ども食堂を含む)の実践

【達成状況】

2017年8月～2018年1月

本学社会福祉学部野尻ゼミの学生（研究代表者のゼミ生）が、「ふぁみりー基地（通称：ふぁみ基地）」と名付け、奥田地区にある NPO 法人チャレンジドにて、実際に子どものための夜の居場所支援を実践することができた。

2018年2月～現在に至る

本学Cラボにて、子どものための夜の居場所支援「ふぁみりー基地（通称：ふぁみ基地）」を実践することができた。

【成果内容】

学校の先生方や、スクールカウンセラー、行政の方々、社会福祉協議会の方々が、学生という存在を介して、繋がりを持ち始めた。硬直した地域や、動き辛い地域の中に、学生（のような）という変化を促す存在が投げ込まれたことによって、そこに繋がる支援者が互いに近づくということが、実際に観察できた。

硬直した地域や、動き辛い地域の中に、学生（のような）という変化を促す存在が投げ込まれたことによって、地域で「何かをしたい」と思っていた方々が動き始めることが、実際に観察できた。さらに、その方々の動きが広がり、次の活動へと繋がっていくことも観察できた。

これらの現象は、ソーシャルワークにおけるシステム理論で説明することが可能であり、今後、地域におけるフォーマル、インフォーマルな支援を包括的に繋いでいくために、また、持続可能な場づくりを行うために、システム理論に基づいて実践プログラムを企画・運営するのが良いのではないかと考えられる。



ハ) 美浜町内の空き家を大学のサテライト拠点として借り、子ども支援の地域福祉拠点として活用することを検討する

【達成状況】

*明らかになった難しさ

- ①美浜町で空き家を借りるものの難しさ＝空き家対策の難しさ
- ②子どもへ食を提供することの難しさ＝自治体によって考え方が違う

【成果内容】

*見えてきた今後の可能性

- ①小さい子どもの母親が子どもを預けて家に帰ることができ、終了時間に迎えにくると満面の笑顔で「ありがとう」と。「ママ友には言えない悩みが学生さんには言える」と。母親にとっても居場所となりうる。
- ②孤食の本学学生が毎夕 100 円を持って「ふぁみ基地」にやってくる
- ③他学部、他ゼミの学生が子どもと接することに慣れてきた。

子ども支援の地域福祉拠点となり得る可能性。

優れた成果があがった点

ピンカスと A.ミナハンの4つのシステムモデルは、ソーシャルワーカー・クライアント（要支援者）・社会福祉機関（児童相談所など）のダイナミックな相互関係を踏まえた体系的な理論を構築したが、この理論モデルにより、子ども食堂や学習支援のコミュニティの形成プロセス、つながりの生成、子どもたちの育ちのプロセスと変容を説明することができるということ示唆された。

4つのシステムモデルをもとに、今回の参与観察で得られた結果を分析すると、下記のようになる。

1. チェンジ・エージェント・システム (change agent system)

ソーシャルワーカー（ケースワーカー）と所属する社会福祉機関（社会福祉事務所・児童相談所・高齢者施設など）が相互作用するシステムのことであるが、ソーシャルワーカー（ケースワーカー）を学生、主任児童委員、地域のボランティア、教員と捉え、所属する社会福祉機関を大学、ゼミ、行政と捉えることができる。ここで最も重要な役割を果たすチェンジ・エージェント＝変化をもたらす人は、学生と主任児童委員と地域のボランティアだと言える。

2. クライアント・システム (client system)

クライアント、クライアントの家族・地域社会（各種の身近なコミュニティ・集まり）が相互作用するシステムのことであるが、クライアントを居場所に集う子どもたちと捉え、クライアントの家族・地域社会には学校（教員）も加えることができる。

3. ターゲット・システム (target system)

ソーシャルワーカー（ケースワーカー）とクライアントの問題解決のために標的（ターゲット）となる相手・状況・社会福祉機関などが相

互作用するシステムのことであるが、標的（ターゲット）は、不登校等の子どもたちの課題であったり、子育てに悩む母親とその子どもである。

4. アクション・システム (action system)

クライアントの問題解決のために実際に活動する人たち（ケースワーカーとクライアント本人を含む）の間にリアルタイムの相互作用が起こるシステムのことであるが、居場所に集う子どもたちや学生、主任児童委員、地域のボランティアが変容をおこしていることが観察できた。

研究期間終了後の今後の展望

美浜町を対象に、子どもの夜の居場所づくりを「食」を通して行う意義と可能性について実践的に検討を行う。本学学生による夜の子どもの居場所支援（子ども食堂を含む）の実践を継続することによって、地域の変容、子どもたちの変容を研究者による参与観察で記録する。これらの継続実践から、子ども支援の地域福祉拠点づくりについて、上記理論に基づいて検証する。

このような実践研究は、地域に生きる子ども達を中心に据えた「地域包括」のシステムづくりに示唆を与えることができるのではないかと考えている。